

その日まで・椎名麟三著

筑摩書房



の日まで

椎名麟三

昭和二十四年十一月二十五日印刷
昭和二十四年十一月三十日發行

その日まで

定價 百八拾圓
地方賣價 百九拾圓

著者 椎名麟三

發行者 古田晃
東京都文京區台町九

印刷者 土岐佐光
横濱市中區龜澤二九

發行所

株式會社

筑摩書房

東京都文京區台町九
電話 小石川 二〇五七番（業務）
振替口座 東京 一六五七六八

文書堂印刷株式會社印刷・鈴木製本

その日まで

第一章

一

夜になつて、精一はガレーヂの壁にもたれたまゝうとうとしてゐた。しかし間もなく情なさうな聲で呟いた。

「全くうるさいなあ。何をべちやくちやあんなにひつきりなしに喋りつゞけられるんだろ。」

しかし眼はひらかない。たゞ黄色い眼脂で貼りついてゐる瞼がふるふてゐるだけである。その眼は、煤けた顔のなかで、ある種の魚の眼のやうに赤黒く丸く腫れ上つてゐる。やがて彼は手を眼へもつて行つてこすりはじめた。やつと眼覺めたのだ。

「全く忙しいお喋りだなあ。」

精一は吐息をした。その五坪ほどのガレーヂのなかは、死んだやうに静かである。その

お喋りは外からやつて來るのだ。それは、かすれた、意地の悪さうな、舌打ちのはげしい、無數の唾き聲である。竹屋の庄三郎が起き上つた。彼は、眼尻に皺の多い顔で、遠いものをたしかめてゐるやうな顔付になつてゐる。やがて獨言のやうに言つた。

「まだ燃えてやがるんだなあ。まきもねえのに勿體ない話だ。」

精一は、そのガレーヂにあふれてゐる罹災者たちを意味もなく眺めてゐた。彼等は、疲れ果てた顔で、壁にそつて寝ころんだり、家族同士かたまり合つてだまつてゐる。精一は庄三郎の獨言へ本能的に相槌をうつてゐた。

「ほんとだよ。全く。これだけ燃えて、いくらぐらゐ飯がたけるだらうなあ。五升ぐらゐかな。」

「五升つて、お前、五升つて……」

庄三郎は、急に眞劍になつて咽喉をつまらせた。話は、思ひのほかの熱意をもつて、人の間に眼ざめた。一體、この下町全體が焼野原になつて、どれだけ飯がたけるだらう。とにかく五升である筈はないではないか。人々はめいめい自分の意見を述べ立てた。笑聲が起つた。精一は、その笑聲を深い快さで聴きながら、自分の傍に死體のやうに寝ころばされてゐる十六七の娘を見てゐた。木綿紉の上衣が焼けこげてぼろぼろになり、乳のあた

りがのぞいてゐる。それは豊かに肉付いてゐるばかりか、この時と場所にふさはしくないほど白い。腰のあたりには、誰かの情で、首縊の焼け焦げた布がのせてある。腰から下は裸なのだ。しかし彼女はまだたしかに生きてゐる。煤けて泥さへついてゐる顔が、苦しうに喘いでゐる。精一は、その幼げな頬のあたりに氣付いたとき、ある暴虐なものが、この少女を凌辱し去つてしまつたことを感じた。恐らくこの娘は、今晚は持つまい。しかしたとへ生き延び得ても、一生この凌辱からは救はれることはないであらう。

「十萬石も百萬石もたける！」

人々の話に耐へかねてゐた地所持の鰻屋の老人が、遂に輕蔑したやうに叫んだ。しかし百萬石つてどのくらゐあるのだらう？——風が強くなつて來た。ガレーヂのまはりのお喋りは、ますます聲高になり、はつきりと焼け残りの燃え上つてゐる音となつてゐる。ときどき勢よく燃えはぜる音がする。しかしその音の大きさが、今はかへつて情ないほど空虚である。精一は音にひかれたやうにガレーヂの入口へ出てゐた。道路の角にあつたためか、側だけぽつりと焼け残つてゐるガレーヂのまはりは、遙かな焼野原で、晝間消えてゐた筈の火が、ちろちろ鬼火のやうに見える。遠い兩國の方に、大きな建物がまださかんに燃えてゐる。

精一は、胸全體が乾いた海綿にでもなつたやうな息苦しさを覺えた。煙が吹きつけて來るからだ。彼は吐息しながら、入口の飲料水を入れたバケツに近寄つた。その焼けたゞれてへしまがつてゐるバケツの水面には、もう灰が一面に蔽つて居り、燃えがらのぼろ屑さへ吹き込んでゐる。彼は、それらを両手で靜かにかき別けて、水をすくひ上げようとした。すると兩手の間から、地上の火へ照りはえてゐる赤い夕焼のやうな空があらはれて來た。

——やがて彼は、まるで世界中でも燃え上つてゐるやうぢやないかと腹立たしさに呟きながら、手から音を立てて水を飲んだ。その彼のすぐ背後で、綿屋の新助の妻が、泣き出しさうな聲で、ひとりで繰り返してゐる。

「男の人つて、どうしてみなあゝなんだろ。どうして今、あんなくだらない話が出るんだろ。どこへたよつて行つていゝか判らないこのときに……」

しかし話はもうくたびれてゐる。人々はお互ひに何億兆石からとび上つた數字を見せようと焦つては、術なさうに笑ふばかりだつた。やがて誰かが寒いと呟いた。ガレーヂの眞中に焚火がはじめられた。自分の子を探し廻つてゐた北山毅が歸つて來た。精一と同じやうにこのガレーヂから徴用になつてゐるトラツクの運轉手である。銭かぶとに作業服姿が、焚火の明りに一層ひよる高く見える。彼は、よく死んだもんだ、全くよく死んだもんだ、

だと誰へともなく咳いて見せながら、自分の妻の傍へ近づいた。妻は、頭から彼のオーバーをかむつたまゝぢつとしてゐる。彼は二三度聲をかけた。頭のあたりのオーバーがちらつと動いた。その下から彼女は恐ろしい眼で彼の後の方をぢつと見てゐた。

「やはり駄目だつた。」と毅は云つた。「旅人橋のたもとに三人かたまつて死んでゐる。ズボンのバンドでやつと判つた。」

しかし彼女はたゞ彼の後の方を遠く見てゐた。それからやつと氣のなさうな返事をした。

「あゝ、さう。」

彼女は、再びのろのろ頭からオーバーをかむつた。毅は妻の傍に坐り込んで、手の眞黒な繻帶を巻き直しはじめた。綿屋の妻が、夫を責めるやうに何かぼそぼそ云つてゐる。精一は、我に返つたやうに壁から身體をはなしてゐた。次の瞬間、彼はこぼつた笑ひをうかべてゐた。全く俺が焼け死んでゐると思ふではないか。——彼は凭れてゐた壁を觸つて見た。やはりそれはガレーヂへ噴き込んだ焰の跡である。その焰の跡が、焼死體から出た脂肪の、くつきり鋪道のアスファルトへ沁みわたつてゐる跡に似てゐるだけだつた。つまり、と彼は大きな息をしながら考へた。今日一日で餘り澤山の焼死體を見過ぎたせゐなのだ。

「萬兆萬石……億兆萬石……兆萬兆石……」と庄三郎が思ひ出したやうに呟いてゐる。「しかしそれだけたける釜は、まあないだらうなあ。」

精一は再びその庄三郎へ相槌をうつてゐた。

「あるよ！　あるよ！」

「ある？」と庄三郎は、一瞬不安な顔になつたが、すぐ傷つけられたやうに云つた。「そんなでかい釜なんてあるもんか！　そんなでかい……」

精一は笑ひながら唄ふやうに云つた。

「地獄の釜だよ。地獄の釜……」

「そんなもの！」と庄三郎は蔑むやうに斷定した。「そんなもの、この世の中にあるものか。迷信だよ。ひどい迷信だよ。」

そのとき突然鰻屋の老人が云つた。

「くだらない……地獄の釜なんて。」

「だけど、大和屋のとつつあん。迷信だつて、ときに身にこたへるときがあるよ。昨夜の夜中なんて……」

「わしは今迄だまつてゐたけどな。」と老人は讀經してゐる坊主のやうにうなじを眞直ぐ

に立てたまゝ云つた。「ふだんから云つてゐた通りお前さんたちはみな臆病者だ。あの火はお前さんの家で喰ひとめたら喰ひとめられない筈はなかつたんだ。北山のあんちやんだつて、綿屋の新助さんだつて逃げた。わしはちやんと知つてゐるんだ。みんな逃げさへしなければ……。もうあんな家は建ちやしない！」

老人はため息をついた。新助が口をはさんだ。

「でもとつつあん、……国防献金の壹萬圓、返してもらへばいいぢやないか。」

「何をいふ！」と老人は腹を立てた。「わしはお前たちと違ふんだ。ちやんと精神といふものがある。お前さんたちは、表面ではぺこぺこ頭を下げてゐながら、裏へまはつては、わしの家の塀の板をひつpegがしてまきにしやがるんだ。お前さんとは云はない。長屋の誰かだ。天皇陛下萬歳と涙をながして云つてゐながら、すぐその後で、陛下のお寫眞で汚い尻をふいて見せるんだ。徴用されても、するけて闇をやつてゐる。小利口な口を利いても眞野のあんちやんだつてさうぢやないか。……徴用がいやならどうしてはつきりいやだと云へないんだ。お上の政治向のことに不服があるなら、どうして錦糸町の四つ角で演説しないんだ……」

「死にたくないんだよ。とつつあん。」と精一は微笑した。

「だからお前さんには精神といふもんがない。精神と云つても判るまいが……たゞの臆病者なんだ。満洲で受けたといふたま傷だつて……疑ふわけではないが……」

「疑つてもいいよ。隊でも相當疑はれて痛い目にあつたんだからな。……でもな、とつあん。その猿江から來てゐる男でかういふ男が同じ隊にゐたんだよ。そいつはな、一個小隊で討伐に行つたとき、前方の川の偵察を命ぜられたんだ。その川へ行く百米ほどの、草もない暴露地帯を横切らなければならない。勿論そいつは出かけたさ。出かけなければ銃殺だからな。だけどぶるぶるふるへてゐやがるんだ。とにかく壕から這ひ出して行つた。だが忽ち小銃の雨さ。そいつのまはりの石にかんかんあたる。とたんにそいつは、きやあとか何とか變な聲を出して、地べたへかじりついたまゝ動かないんだ。顔が眞蒼になつてゐて、眼から涙が流れてゐる。それが俺……さう、俺たちの方からよく見えるんだ。俺たちはそいつが餘り動かないので、てつきりやられたと思つた。するとまたどそぞそ這ひ出してゐる。たまが途切れたからだ。勿論、今度は、はげしくやつて来る。すると事もあらうに、助けて呉れ！　なんて馬鹿な悲鳴をあげながら、くぼ地へ頭を突込んでゐる。蚤のやうに尻を丸出して、その尻がまたぶるぶるふるへてゐる始末だ。それからまたたまが來なくなると……」

人々は噺き出してゐる。その笑ひのなかで毅が腹を立てたやうに立つた。

「眞野！ よしな！ それでもいつもお前はちゃんと立派に任務を果たして来たぢやないか！」

精一は毅を見た。その眼はあはれむやうに細く強く光つてゐた。精一は笑つた。

「俺はたゞそれが云ひたかつただけさ。」

毅は眼を落した。それから急に何のために立上つたのだらうといふ風に、あたりを見廻すと、しばらく意味もなく脇腹を両手でさすつてゐた。やがて大儀さうに吐息すると歩き出しながら獨言のやうに云つた。

「どうも子供のことが氣にかゝつて仕様がな。今から行つて始末して来よう。……眞野も、くだらないお喋りをやめて、女房でももつと探して見たらどうだい。」

誰かの深い溜息が聞えた。ガレーヂのなかは靜かになつてゐる。女房、と精一は考へる。どうして女房のことが少しも氣にならないのだらう。昨日と今日で、全然別の世界にかはつてしまつたやうではないか。ほんとに俺に昨日まで女房といふものがあつたのだらうか。——やがて精一は、壁に凭れたまゝうとうとしてゐる。すると猫のやうな白い長いひげを生やした雄雞が、身動きもしないで、その丸い眼で彼をいつまでも見つめてゐるので

ある。彼は苦しい吐息をした。すると大きな柱時計が眼の前にかゝつてゐる。ぴかぴか光つてゐる丸い眞鍮の振子が單調に揺れてゐる。しかしその振子の上に一匹の小猿がつかまつてゐるのだ。小猿はぶらぶら揺れる振子が不安さうである。揺れるたびに、落着く上や下をのぞいたり、左右を見廻したりしてゐる。そしてときどき訴へるやうな眼を精一へ向ける。……

精一は眼をこすりながら起上つてゐた。疲勞のためか身體がひどく熱っぽい。傍の娘がひどく呻いてゐる。

「ほんとによ！　どこかに擔架か戸板みたいなものないかい？」と精一は眼をさましてゐる庄三郎へ云つた。「どこの娘か知らないけど、毛利學校まで持つて行かうや。傍にゐる者がたまらんよ。」

二

夜は、まだ燃えてゐる火で明るい。その焼け残つた小學校の前の道路には、負傷者を運んで來た、タイヤのない焼け錆びたりアカが數臺捨てられてゐる。精一は、庄三郎と急ごしらへの粗末な戸板をかついで玄關へ入つた。玄關の學童机に凭れて、白髪頭の警戒

員の老八が居眠りをしてゐる。精一は、その老八を呼びました。しかしそのとき、老人の威厳まで呼びましたらしく、老人は不機嫌に下駄箱の前を顎でさしながら云つた。

「そこへ置いておきな。」

そして老八は立上つて暗い廊下へ消えて行つた。やがて便所の戸をあける音がした。精一は机の下に一枚の紙片の落ちてゐるのを見た。踏まれて泥だらけになつてゐるが、紫色の濃い鉛筆の跡が妙に生々しい。恐らくこゝから出かける重傷者が、鉛筆をなめなめやつと書き記したと思はれる遭難先と名前が見えた。庄三郎は早速その紙片を拾ひ上げてゐたが、すぐにたまらなさうに呟いた。

「紫色の鉛筆の色つていやな色だなあ。俺は昔から大嫌ひだよ。」

精一は晝間見た部屋部屋を、もう一度妻を求めてさがし廻つた。部屋のなかは、近くに燃えつゞけてゐる火のためか意外に明るい。そして消毒薬のにほひはほとんどなく、汚穢と焦げたぼろのにほひが強かつた。ある部屋で、繻帯のなかの一つ目が、精一の後を追ひながらちつと見てゐた。身體中布を巻かれてゐて性別さへ判らない。そして他の患者と同じやうに床の上ちに寝かされてゐる。精一は、或ひはと思つて近寄つた。するとその眼は、男のはげしい憎惡にかゝやいた。精一はその部屋を出た。玄關へ戻ると、娘はまだ置

かれたまゝである。焼材に焼釘を打ちつけた戸板の上で、頭が機械的にゆつくり左右に動いてゐる。

精一は、そのまゝ玄關を出た。するとそこに庄三郎が立つてゐる。彼は、誰かの消息を探しに來たらしい顔見知りをつかまへて熱心に話をしてゐる。自分の異常な體驗をつたへようとしてゐるのだ。

焼跡の火に照し出されて、上氣して子供のやうな喜びに輝いてゐる彼の顔がはつきり見える。彼は、精一に氣がつくと、泡をふくんだ口で救はれたやうに叫んだ。

「眞野のあんちゃん！……さうだろ？　ほんとにあのときと云つたら！」そして再び相手へ向くと、もどかしさうに手眞似をまじへながら喋りつゞけた。「かう、逃げる……投げる……伏せる……走る……あなたには判りつこないよ。經驗しなきゃあ。ほんとだよ。そりや、もう、逃げる……走る……伏せる……投げる……駈ける……」

そのとき學校から、うすぐろく變色して、首から上が二倍ほどにふくれ上つた異形な顔の男が出て來た。しかも附添ふ者もなく、たつたひとりである。それは生きてゐるといふのが不思議なほど無残な火傷で縋帶もない。精一は、この男がどうして歩けるのか理解出來なかつた。しかしその男は、のろのろと正確に歩いてゐるのである。だがそのくさつた